

## 巻 頭 言

## 所 長 就 任 に 当 た っ て



所 長 増 子 昇  
Noboru MASUKO

生産研究技術研究所の所長就任に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

当研究所は「生産に関する技術的諸問題の科学的総合研究並びに研究成果の実用化試験」を行うことを目的として、昭和 24 年に発足した工学全般に関わる総合研究所であります。今年の 5 月 31 日で満 37 歳を迎えるわけで、まさに働きざかりの、充実した時期にあると言えます。現在 44 研究部門、千葉実験所、3 研究センター、教職員総定員 421 名の大きな組織です。さらに大学院学生 233 名、外国からの留学生、企業などからの研究生を含めると全体で 800 名を超える規模を持っております。

所長の任務は一言でいえば、大学本来の姿である自由で創造的な研究を行う場を全構成員の協力の下に守り育てていくことにあるといえましょう。そのためには、“ひと”、“かね”、“もの”、“ばしょ”、“ちえ”、“いよく”、といった研究の場に欠かすことのできない大切な条件一つ一つをさらに一層強化し整えて行くことが仕事になるものと心得えています。皆様のご協力を心から御願ひ申し上げます。

幸いなことにわれわれの生産技術研究所は、諸先輩が外部からの圧力に堪え、雑音に惑わされずに信念をもって造りあげた総合工学の伝統と実績を背景に、広く工学全般を学際的に取り扱う能力と多方面にわたる成果によって、各方面から注目を集めております。国際的にも IIS (Institute of Industrial Science) の評価は定まりつつあると言えます。われわれは現在科学技術の支えなしには生きていけない状況にあり、科学技術はいわば“第二の自然”をであるとさえ言われます。この意味での“自然”を対象とする科学として適当な言葉を探すとすれば、私には、“Industrial Science”がまさに当を得ていると感ぜられます。素晴らしい言葉を用意しておいてくださった諸先輩に敬服の意を表するとともに、近づいて来る 21 世紀への夢を支える基盤となるべき“Industrial Science”をわれわれ全員の努力によって、他に先駆けて築くことを目標にしたいと考えます。

今年の 1 月 6 日の朝日新聞「天声人語」に、朝日賞をもらったカメラマン宮川一夫氏の言葉として、「撮影所も創造の場でなくなりビジネスの場と化しつつある。よい感覚をもった人でも消耗品的に扱われている。」とありました。創造をもって基底価値とすべき“大学に於ける研究所”にとっても他人事とは思えません。

ビジネスの基底価値は何かといえば、能率とか効率ということになりましょう。営利を目的とする企業活動と異なり、科学を目的とする創造活動においては、あまり効率に囚われ過ぎると困ったことが起きます。すなわち“すぐに結論が出ないと落ち着かない”、“自分のせまい能力で出来ることしか考えない”、“外部の条件に振り回される”、“みせかけの成果で間に合わせる”、といった研究の場にはあまりふさわしくない傾向が現れるということです。もちろん効率を無視して良いといっているわけではありません。むしろビジネスを手際良く処理することができなければ、本来の活動の場を確保できなくなるというのが現実であり、また当然のことでもあります。ただそれが過ぎて創造的な雰囲気や歪めることにならないよう自戒しましょう。

大学が社会にたいして受け持つ役割は“学問の自由”の下に行われる創造と信じます。そのためには想像力が自由に遊べる活気のある討論の場と社会に広く開かれた情報網と高い能力に裏付けられた情熱が必要です。われわれの生産技術研究所に多くの期待が寄せられる所以であります。

これからの具体的の方針につきましては、前所長の尾上先生の下で将来計画委員会が作成した報告書「東京大学生産技術研究所の次の発展のために (昭和 60 年 4 月)」が良い道しるべを与えてくれます。良く考えられた将来構想とそのための着実な基礎づくりを進められた尾上先生に厚く感謝申し上げます。

皆様のご支援、ご鞭撻を御願ひ申し上げます。